

## ヒール部にのみ搭載されるエアユニットは マイケル・ジョーダンに相応しい特性を有していた

NIKEが誇る“AIR”を搭載したバッシュと言えば、多くのスニーカーヘッズがAIR JORDANのファーストモデルを思い出す。今では“AIR JORDAN 1”と呼ばれている1985年生まれのバッシュが採用する“AIR SOLE”には、ヒール部に“くさび”を打ち込んだようにも見える“AIR WEDGE”と呼ばれるユニットが内蔵されている。オリジナルが1982年に発売されたAF1がフルレングスのエアユニットを採用したのに対し、後発モデルであるAJ1の“AIR”はヒール部のみ。AIR MAXシリーズの進化が“搭載エア量の増加”を命題に掲げていた歴史に照らし合わせると、スニーカーとしては退化しているように感じるかもしれない。ただ、バッシュとランニングシューズに求められるパフォーマンスは同一では無い。安定したペースで走り続けるランニングに対し、バスケットボールは激しいストップ&ゴーを繰り返し、ポジション毎に求められる動きも異なってくる。そのスポーツを支えるシューズテクノロジーが細分化するのも必然だろう。

エアユニットが無いソールはフロント部が薄くなり、それに比例して接地感が向上する。その接地感はクイックな足運びを武器とするバスケットボールプレイヤーにとってのメリットを生む。そのヒール部にAIR WEDGEを搭載すると、ジャンプ後の着地時には衝撃を吸収してくれる。AJ1のシグニチャープレイヤーであるマイケル・ジョーダンの、スピードにあふれ、立体的な動きを支えるクッションングとして、これほど相応しいテクノロジーはあるだろうか。AIR WEDGEはAJ1に偶然採用されたのではなく、マイケル・ジョーダンに相応しいシューズテクノロジーとして選ばれたのだ。さらに一般的なミッドソール素材であるウレタンフォームに対し、当時のエアユニットは重い特性を有していた。重いエアユニットの搭載箇所をヒール部に限定する事で、僅かながらの軽量化に貢献している。スニーカーとして履く復刻モデルでは重さの違いを感じにくいものの、当時のハイエンドバッシュにとっては必要不可欠なNIKEのコダワリだったのだろう。

AIR JORDAN HIGH  
CHICAGO

Release year: 1985  
Style code: 4280  
参考商品

